8) 歯 科 治 療

上 原 進
(日本大学歯学部)

心身障害児の保護者にとって，歯科疾患に対する処置を求める demand はきわめて強く，一方，その機会が乏しく歯科医療対策の中の大きな課題となっている。しかし心身障害児の歯科治療を健常者のそれと同列において対処することの困難さは，成人と小児ですら諸種の問題点が提起されている中で，それ以上の問題点を伴っていることにある。その問題点の一つとして指摘しうることは，歯科受診時の取り扱いの問題と云えよう。

これが一方では全身麻酔下歯科治療の必要性を生み出す理由にもなる。

ところが全身麻酔下歯科治療が唯一の，絶対的な解決手段となり得ないことも事実である。

殊に個人をベースにしたものから心身障害児集団レベルでの医療を考慮した場合に，地域的格差を招き易いのが現状である。

さらに，心身障害児の療育の中で，その能力の開発をも含めた，リハビリテーションが意図されていて，歯科領域においても，これを受けて，"NORMALIZATION" の考えかたが導入されようとしている時期に一般外来ベースによる歯科治療の方法論開発，ならびにその受診能力の判定を明らかにしていくことも意義あるものと云えよう。

研究の方法

歯科治療時にはさまざまな心理的刺激が加えられている。このような刺激は一方で，患児自身のもつ過去の体験，知識，精神活動，性格などによって型づくられている心的状態で受けとめられて，諸種の行動を示しているものと云えよう。

一方，歯科治療を受診させ，これに適応させようとする歯科的な取り扱いは，これらの刺激の量と質を変換させ，組み合わせながら実は患児自身の学習効果を期待しているものと云えよう。

しかし，このような対処の仕方を心身障害児に適応するについては殆んど研究がなされていない。

今回の調査はそのための予備調査として，歯科治療時に示す患児の行動を心理臨床家に観察せしめて，その変化の概要を要約せしめた。

調査結果

(1)歯科的刺激の加わる時期と刺激の内容

A〕入室時
- 視覚的に与えられる刺激
- 歯科室内の雰囲気
- 歯科器材設備
- 人（歯科医）（看護婦）（衛生士）（その他）

B〕対話時
- 視覚的に与えられる刺激
  - A〕に同じ
- 聴覚より与えられる刺激
  - 人の動きから生ずる音
  - 会話

C〕治療椅子への導入
- 動作から与えられる刺激
- 視覚
- 聴覚

D〕治療椅子上での初期刺激

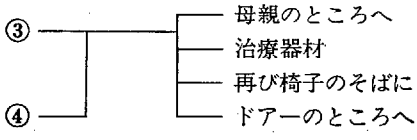
視覚　近接位置にみる歯科器材
　　人の動き（器具準備を含めて）
　　照明
聴覚　術者ＶＳ助手の会話
　　術者ＶＳ保護者の会話
　　術者ＶＳ患児への会話
　　器具の接触音，作動音
動作，口腔内への器具挿入
　　各種の反射刺激

E〕治療椅子上での中期刺激
D〕につづいて
痛覚
触覚
　　などの刺激が強力に加わり
さらに治療器材のもたらす
　　音
　　圧
が加速度的に増加していく。

このような刺激下における患児の行動を観察した結果，おおむね次のような行動様式が認められた。

A〕入室直後
①チェアに自らすすんですみやかに乗る
②室内を見渡して後チェアにのる
③室内を見渡して後チェア以外のところに行く
④泣き出すが，チェアにのる
⑤チェアに乗るが，すぐに降りてしまう
　ⓐ泣かない
　ⓑ泣きながら
⑥泣き出し，チェア以外のところに逃げる

③および⑥はさらに



と変化をみせる。

但しこれらの動きは行動可能な障害児であって肢体不自由児の場合には①については第3者の手が加わって位置の移動をおこし始めたときに特に拒否反応のみられないものとなる。⑤については　拒否行動が示された場合となる。

この他，
⑦母親にまつわりついて離れないもの
などが主な行動様式であった。

B〕治療椅子上での初期行動
①抵抗なく，すぐ開口する
②歯ブラシを要求する
③チェアに大人しく寝ていない
④器具に興味を示す
⑤医師が治療椅子に近づくと，泣く，さわぐ，逃げようとする
⑥医師が器具を使いだすと泣く，さわぐ，逃げようとする
⑦医師に協力的
肢体不自由児の場合，明らかな動作を起すことが出来ない場合が多いが，わずかに示される動作はこれらのカテゴリーに振りわけることが出来る。

C〕治療の中期および後期について
①種々治療器具およびその使用について反応する
　a）ラバーダム装着
　b）注射
　c）エンヂン
　d）タービン
　e）バーキューム
　f）開口器
　g）探針，歯鏡　etc

これらの反応は　特定のものに対するもの，その幾つかに対して反応するもの，全てについて一様に反応するものに区分される。

②絶えず治療椅子上で暴れ，逃げようとする
③大声で泣く
　a　泣いているだけで動作では拒否行動はみられない
　b　泣きながら　暴れる
④器具を払いのけようとする拒否行動
⑤刺激に対して呕吐反射を示す

⑥医師に話しかけようとする
⑦協力的，順応
⑧歯ブラシなどを要求して，他の行為に逃げようとする

このような反応を示しながらも治療の完了後の行動様式は大別して

D〕治療後
①すぐに治療椅子上で大人しくなる
②治療椅子から離れるとすぐ大人しくなる
③母親のもとへ戻ると大人しくなる
④興奮状態が治らない
⑤逃げるようにして診療室から出ていく
a　興奮しつつ
b　興奮は治りながらも逃げようとしている
⑥術者のアプローチに対して反応する
a　ポジティブな反応
b　ネガティブな反応

待合室における行動

歯科受診のために来所したものの待合室はプレイルームを兼ねたロビーがあてられている。ここでの行動は

①待合室で元気にあそんでいる
②寝ている
③ぐずっている

の三種に分けられ

診療室への誘導に際しては

①すぐにしたがって，診療室に入ってくる
②したがってくるが，中途で泣き出す。しかし，診療室には入ってくる
③泣き出して暴れる。興奮する
④泣き出して逃げ出す

と云った行動が示されていた。

3）母親の行動

前述の如き患児の行動に対して，母親のとる行動様式が全く無関係のものとは思われない。

そこで診療室内の治療椅子への導入前後の母親の行動をみると，患児の動きに対応して次のような行動が現われていた。

①しかり型
患児の行動に対してそれをしかるもの
a）アメとムチ型
治療させないと○○しませんよ！
b）強制型
それ位はがまんしなさい！
②哀願型―懇願型
良い子だから治療してちょうだい
③鼓舞型
頑張りなさい！　もう少し！
④みていられない型
こわくてみていられない，目をそらしておどおどしている。
⑤協力型
平静に，歯科医の指示を受けながら協力している。

などの行動がみられたが，多くの母親は終始これらのいずれかに属するもので，状況に応じて変化することは少なかった。

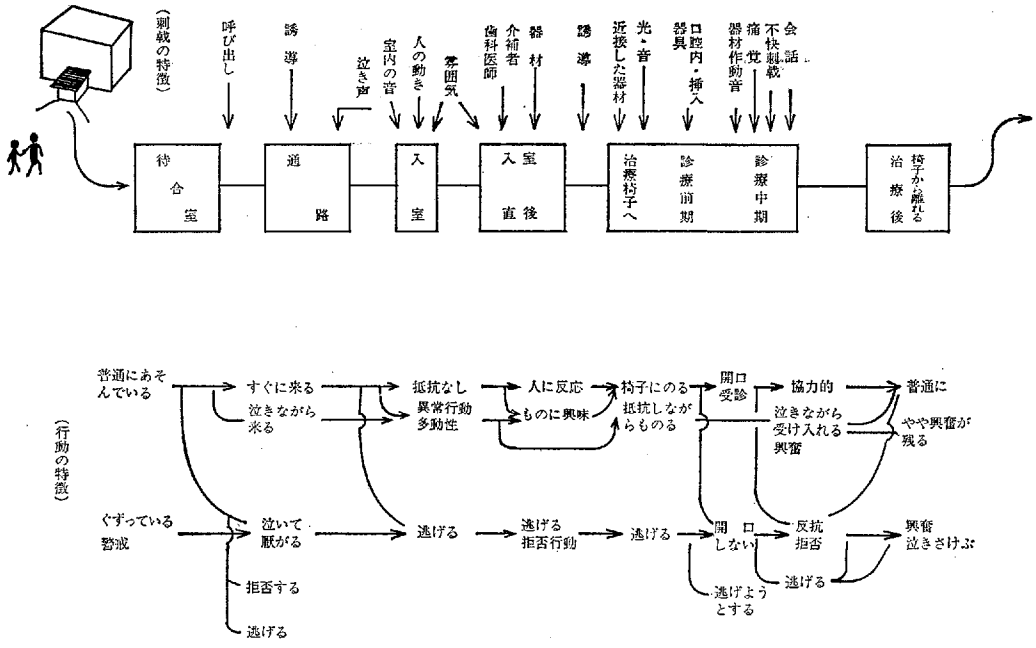
一方，歯科医師との対話についてみると

①yes 型
歯科医のアプローチに対して〝ハイ，ハイ〟の反応のみで，果して理解した上の意志表示なのか，その行動からみて理解していないのかわからない。
②知識過剰型―意識過剰型
積極的な発言，顕示性がみられるが，身についていない。
③自己中心型
一方的な要求で，なんでもいいから早く直して欲しい！
歯科治療の実態―患児の行動には留意していない。
④協力型

などさまざまな行動が示されていた。

考察とまとめ

1970年代に入り，小児歯科における取り扱いの理論の中に行動科学の概念を適応させたものがアメリカにおいてかなり紹介されてき



た。近年ではさらにこの手法を心身障害児に適応させようとしているものもみられる。

歯科治療時に示される患児の行動を捉え，これを歯科受診を可能にするような行動に変容させようと意図する場合に，まず，現実に示されている行動様式の概要をとらえることが必要である。

このような目的で始められた行動観察を，より客観させるために，歯科医の他に心理臨床家を加えて観察を行い前述の様式を得たものである。

またこの観察期間を通じて，同一患者の行動の様式の推移をみると，〝ある種のパターン〟化が子供の中に生じてくるように思われる。例えば治療椅子上でまずハブラシの刷掃をもって始まるように条件づけされた場合にはこの流れを乱したときに不適応行動を示し始める例が少なくない。

一方，同種の刺激を与えても生じうる反応は必ずしも継続性にはみられず，その時々によって変化している。またある例では緩慢であるが，類似の行動を示しつつも，歯科受診に対する適応行動を示した自閉症児がいる。

今後，これによって得た行動様式をさらに整理分類し，それに対応する刺激の種類とその質，量の変化を加味しながら個体別の変化を追い，歯科治療時の取り扱いの糸口を得たいと考えている。

検索用テキスト　OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

心身障害児の保護者にとって,歯科疾患に対する処置を求めるdemandはきわめて強く,一方,その機会が乏しく歯科医療対策の中の大きな課題となっている。しかし心身障害児の歯科治療を健常者のそれと同列において対処することの困難さは,成人と小児ですら諸種の問題点が提起されている中で,それ以上の問題点を伴っていることにある。その問題点の一つとして指摘しうることは,歯科受診時の取り扱いの問題と云えよう。